

日本中國學會報 第七十集
二〇一八年十月六日 發行 拔刷

『天地瑞祥志』第十四神項所引志怪佚文について

——八部將軍と四道王

佐野誠子

『天地瑞祥志』第十四神項所引志怪佚文について

——八部將軍と四道王

佐野 誠子

はじめに——『天地瑞祥志』とそこに引用される六朝志怪

『天地瑞祥志』は、薩守真なる人物が編纂した天文・術数の内容を主とした類書である。その前書き(第一におさめられる啓)によれば、唐の麟徳三年(六六六)四月、大王に献上したという。薩守真という人物は他に記録がなく、どのような人物であったのかはわからない。また、前書きにある麟徳三年は、三月で改元しているため、四月とあるのは不審であり、謎として議論されている。

『天地瑞祥志』は、中國では、各種目録類に著録がないのみならず、書名への言及さえも見當たらぬ。しかし、『日本國見在書目録』では、天文家に「『天地瑞祥志』廿」と著録され、陰陽道の家で代々傳えられてきた。現在、日本や朝鮮半島の資料に『天地瑞祥志』からの引用文が存在することがそれを証明する。ただし、日本でも現在残るのは、前田育徳會尊經閣文庫が所蔵する江戸時代貞享三年(二六八六)の寫本がほぼ唯一のものであり、それも完本ではなく、全二十巻中第一、七、十二、十四、十六、十七、十八、十九、二十に限られる。京都大學人文科學研究所には、尊經閣文庫本の忠實な寫しがあり、金澤市立

多摩川圖書館加越能文庫には第七の部分的な寫本が残る。^①

『天地瑞祥志』は、テーマ別に各種書籍からの引用を行っている。その引用する書籍には、經書や正史といった現存する書籍もあれば、古い書籍など、失われてしまった書籍も多く含まれる。そして、『天地瑞祥志』は、現存する部分のうち、第十四、十六、十七、十八、十九において、干寶『搜神記』、劉義慶『幽明錄』といった六朝志怪が引用されている。

志怪は、現在も一定量の資料は残るものの、經書や正史のように原本そのままに傳わっているものはほとんどない。『搜神記』の現行二十巻本は、明末に類書等の引用等をもとにして作られた再編集本であり、『幽明錄』は、魯迅により『古小說鈎沈』に佚文が収集されたものである。

日本にのみ残存する中國典籍はいくつかある。また、その典籍にのみ残る佚文資料があるのは『天地瑞祥志』に限らない。新美寛編、鈴木隆一補『本邦殘存典籍による輯佚資料集成 續』(京都大學人文科學研究所、一九六八年。以下『本邦殘存』と省略)は、『天地瑞祥志』も對象として、佚文収集を行っている。しかし、同書では、『搜神記』など、

明末の再編本が存在する書籍については、佚文収集が行われておらず、同書だけでは、『天地瑞祥志』の（また、他の本邦殘存典籍の）志怪佚文の全貌を知ることができない。また、『天地瑞祥志』に残された志怪の佚文について、言及されたことは管見の限りほとんどないようである。

筆者が、『天地瑞祥志』が引用している志怪資料について調査したところ、延べ數で五十條の引用があった。その中には、現在他書にも同一出典で引用されている既知の文章も含まれるが、他にまったく引用をみない佚文資料が十一條含まれていた。

筆者は、すでに京都大學人文科學研究所本を底本とした『天地瑞祥志』第十四と第十七の翻刻を行った。また、別稿において、『天地瑞祥志』第十四鬼項に引用される『列異記（傳）』の佚文について、「歌い骸骨」と呼ばれる世界的に分布する話型の最初期に屬する話であることを分析した。

本稿においては、『天地瑞祥志』第十四神項にみられる『幽明錄』の八部將軍及び『續搜神記』の四道王に關する佚文を取り上げたい。この二つの話は、詳細不詳の書籍とともに引用されており、記述の内容に共通點がある。この二話を分析することで、志怪における神に關する話の特徴、術數・宗教文獻に記述される神との違いについてを考察することができそうである。

一、『天地瑞祥志』第十四神項の構成

『天地瑞祥志』第十四は、卷頭の目錄によると音聲、童謠、妖言、革俗、神、鬼、魂魄、物精の八項目を収録する。現在の寫本は、音聲の途中から、本文の脱落があり、童謠はまったく残らず、妖言の途中から再

開している。その後は、末尾まで大きな脱落はないようである。この第十四後半の神、鬼の項目に、志怪の引用が多くみられる。『太平廣記』に魂魄卷があるように、魂魄項などにも志怪の引用があつても不思議ではないが、魂魄の項目は、『春秋左氏傳』の記事及び、『楚辭』「招魂」の部分的な引用のみである。また物精の項目は、『白澤圖』及び『玄中記』を多く引用する。

神項の内容を筆者なりに整理すると、以下のようになる。書名のあとに（ ）を附したのは、出所を調査した結果である。この通り、現行の書籍で確認できる文章もあれば、佚文もある。

一、神に關する基本的な言説

- (a) 『易』繫辭上
- (b) 『禮記』祭法
- (c) 『河圖眞記』(佚文)
- (d) (顧)野王曰(『孝經』感應章疏に類似文)

二、神の出現

- (a) 『左傳』莊公三十二年
- (b) 『太公金匱』(『藝文類聚』卷二、『太平御覽』卷八百八十二等)
- (c) 『漢武帝故事』(『太平御覽』卷七百三十九等)
- (d) 『幽明錄』(『太平廣記』卷三百十八)

三、蔣子文

- (a) 『搜神記』(二十卷本『搜神記』卷五)
- (b) 『續搜神記』(二十卷本『搜神記』卷五)

四、八部將軍

- (a) 『神譜』(不詳)
- (b) 『幽明錄』(佚文)

五、四道王

(a). 籍? (不詳)

(b). 『續搜神記』(佚文)

六、丁新婦

(a). 『搜神記』(二十卷本『搜神記』卷五)

七、紫姑

(a). 『異苑』(『異苑』卷五)

八、弩神

(a). 『玉韜』(佚文だが、『抱朴子』等に類似記述あり)

このように、基本的な言説を引用したあとに、個別の神についての記述を順序だてて配列している。

志怪は、その類似した内容を、志怪以前の書籍に見いだすことが難しい。また、抽象的な議論はほとんどなく、事件を記録する。そのため、一のような基本的な言説の部分では、志怪は登場しない。そして、二の神の出現については、『左傳』の周の恵王の時に莘の地に降りた神、『太公金匱』の周武帝のところにやってきた四海神(後述)、『漢武帝故事』の前漢武帝の外祖母平原君が仕え、霍去病の前にあらわれた神君と、歴史人物と関わりをもつ神の記述に引き継ぎ、『幽明録』の陳慶孫のところにあらわれた神を許稱する鬼の話が配列されている。陳慶孫は、この話にしか名前を残さない人物であり、また神も本物の神でないなど、前三者と違いがあるが、神が出現するという点で共通するとみなし、志怪とそれ以前の書籍につながりを持たせたのだろう。

三、六、七の蔣子文、丁新婦、紫姑は、志怪の『搜神記』や『異苑』を出處とする後世にも記録が傳わる神であり、記述の中心は、祀られるようになった由來である。二(c)の神君についても、前半で天折

『天地瑞祥志』第十四神項所引志怪佚文について

した女が神となった由來が記述されるが、話の重點が、由來よりもその靈驗にあった。

そして、四、五、八の(a)については、神の名前の列挙があり、四、五の(b)では、志怪である『幽明録』『續搜神記』を出處として由來ではない、不思議な神の話が引用されている。『幽明録』からとする八部將軍、『續搜神記』からとする四道王という神についての話は、他に記述がみられない。これらの概要を紹介し、関連資料をみていき

二、八部將軍

二、一 『天地瑞祥志』の引用文

まず『天地瑞祥志』の八部將軍の文を紹介する。

『神譜』曰、「□□八部將軍。第一將軍姓五、名磬、字仲才。第二將軍姓俞、名羨家、字施、名橫、字仲文、第仲紀。第三將軍、姓四將軍姓許、名芮、字仲伯。第五將軍姓曹、名桓、字合先。第六將軍姓領、名湛、字元祥。第七將軍姓樂、名喻。第八將軍姓楊、名朝兒也。」

『神譜』にいう。「八部將軍。第一將軍姓は五、名は磬、字は仲才。第二將軍姓は俞、名は羨家、字は施、名は橫、字は仲文。第仲紀。第三將軍、姓。四將軍姓は許、名は芮、字は仲伯。第五將軍姓は曹、名は桓、字は合先。第六將軍姓は領、名は湛、字は元祥。第七將軍姓は樂、名は喻。第八將軍姓は楊、名は朝兒である。」

『神譜』はとりあえず、書名であると判断しているが、各種目録に著録がなく、また他類書にも『神譜』という書名はみられない。『本邦殘存』の子部五行類においても、この一條のみが採録されている。

ここでは、八部將軍は八人の神とされ、姓・名・字が列記されているが、第三將軍の前後で記述が亂れている。そして、ここにあげられている名前や字は、どこを捜してもみつけないことができなかった。

『神譜』に引き續き、『幽明錄』の文が引用されている。

『幽明錄』曰、「有一人□車遇寒雪、不得至。告廟主簿、求在門外亭屋中。夜眠覺、見一人有頭首、兩臂以下便無、行在空中。訪之於俗巫。云、『是八部將軍也。』」

『幽明錄』にいう。「ある人がいた。車で移動していたところ冷たい雪に降られ、目的地にたどりつけなかった。廟の主簿に事の次第を告げ、廟の門の外の建物で一晩を過ごすことをお願いした。

夜、眠りから覺めたところ、頭部があつて、兩腕のない人物が、空中を歩くのを見た。このことを俗巫に尋ねてみたところ、『それは八部將軍です。』と言つた。」

この文は、『古小説鈎沈』本『幽明錄』には収録されず、また他書の引用もない。頭部はあるが、腕のない空中を歩く人物が、俗巫（正規ではない廟にいる巫覡を指すか）によると「八部將軍」だというのである。

先の『神譜』では、八人の名前があがつていたが、ここでは明らかに一人の姿となつてゐる。これは、八部將軍というものが、『神譜』と『幽明錄』とでまったく關係ないのだろうか。あるいは、俗巫は、八部將軍のうちの一人という意味で八部將軍と答えたのだろうか。六朝志怪特有の、わかることのみがしるされる記述であり、この神があらわれた意味はまったく説明されていない。

二、二 將軍神

『天地瑞祥志』の八部將軍の文では、『神譜』でも『幽明錄』でも「神」の語はもちいられていなかった。『神譜』は、書名からすれば、神の

名簿なのだろう。實際、將軍は、六朝當時には確實に神の呼稱としてもちいられていた。

買地券という、墓に埋葬された冥界での土地購入を示す文書がある。買地券には、さまざまな神の名がしるされ、中には、西王母、東王公、王子喬など、青銅鏡の銘文によくでてくる神や神仙の名もある。この買地券のいくつかには、土地を與える神の名をしるす中で、○○將軍が登場することがある。買地券において將軍神の名稱は、劉宋以降あたりから目立つてみられるようになる。劉宋、五代の買地券にみられる「將軍」の名をとりあげてみると、營土將軍、游邏將軍、當道將軍、道路將軍等がある。そして、これらの將軍の名もほとんど傳世文獻資料には記述をみない。買地券以外における將軍神としては、北魏・酈道元『水經注』に「五戸將軍」を祀つた祠という記述がある。^⑩

買地券の神に戻る。買地券における將軍神以外の神には、天師道の神が目立つ。ここからは、買地券の神は民間信仰から道教への過渡期の神であつたことがいえるだろう。實際、早期の道教の符籙類の經典では、信者を守護する役割を擔つた神を「將軍」「功曹」「死者」と稱することが多い。その後の道教信仰でも將軍神は多く存在し、南宋以降に起こつた唐宏・葛雍・周武の三將軍などが有名である。彼らは元代の成立とされる『三教搜神大全』においては、字までしるされている。このように、道教における將軍神は、名前を詳細にしるされる點、先の『神譜』と共通する。

また、これらの神の由来として、將軍の亡靈が疫鬼となる場合があることが指摘されている。^⑪『幽明錄』の八部將軍の話で、神の姿について腕がないと描寫されていたのは、戦争による負傷を表わしていたのかもしれない。八部將軍は、これら將軍神の存在から、そのような

過渡の神のうちの一種であったと考えられる。

二、三 八人の神

八部將軍の八部とは、何を意味しているのだろうか。『神譜』では、八人の名前が列擧されていた。八部將軍という名稱そのものは、他にみつけることができなかったが、八人の神という記述は、古くからある。

その最古の例は、『史記』封禪書にあり、始皇帝が封禪をした際に八神を祀っている。八神は、それぞれ天主、地主、兵主、陰主、陽主、月主、日主、四時主という名があると説明される。同内容をしるす孝武本紀における『史記集解』では、三國魏の文潁による八通鬼道を切り開き整えたために八神という、また、八方の神ともいうとの注を引き、『史記索引』^①では、三國吳の韋昭による天地陰陽日月星辰四時の神であるとの注を引く。複数の説があることからすると、八という數字が先にあり、そこに、天體や陰陽なり、方角なりをあてはめたようである。

『神譜』のように名前を列擧する記述は、術數文獻の特徴でもあり、また、道教經典においてもよくみられる。道教經典中に八部將軍という名稱そのものはみつけれなかったが、「八部○○」、という名稱であれば、幾つか探し當てた。以下に列擧する。

- 八部禁兵（東晉末〜劉宋初『太上洞淵神呪經』卷二遣鬼品、南宋・蔣叔興『太上黃籙大齋立成儀』、不詳『北帝說崑落七元經』）
 - 八部天神（六朝末〜隋『太上洞玄靈寶業報因緣經』卷八）
 - 八部瘟神（南宋・謝守灝『混元聖紀』卷六）
- これらの八部○○はすべて疫神である。
- その他、時代はあとになるが、唐宋間に成立したという『太上說玄

天大聖眞武本傳神咒妙經』には、八煞將軍という神格が登場する。同書の南宋の陳松の注では、八名分の名前が列記されている。さらに時代がくだり、元・朝浮雲山聖壽萬年宮道士趙道一編『歷世眞仙體道通鑑』卷十八張天師には、八部鬼神という神について、個別の名前があげられている。先にも述べたように『天地瑞祥志』が引用する『神譜』は、八部の語や、名前の列擧という點で、道教との關わりを想起させるのである。

中國以外に目を向けると、内藤湖南は、關西の兵主神社の兵主が、始皇帝が祀つた八神に由來するのではないかとしている。他、日本の陰陽道には、八將軍という方位を司る神格がある。これは、朝鮮半島及び日本に廣がる將軍神信仰である。朝鮮半島および日本に傳わつていた『天地瑞祥志』に八部將軍の記述があり、同地にこのような信仰があることは、何かしらの關係があるのかもしれない。

二、四 志怪における複数の神の記述

八人の神は古くから存在し、將軍も神としては珍しいものではなかった。

ただ、これらの八人の神は、術數・宗教文獻においては、それぞれに名前を持つており、『幽明錄』佚文のような、一人の神という言説はなかった。そもそも志怪において複数の神はどのように表現されているのだろうか。

『幽明錄』の著者である劉義慶に關わるテキストとして、『天地瑞祥志』の話とは別に八大神という神の話がある。これは、『太平御覽』卷八百八十二及び『太平廣記』卷二百九十四、『廣博物志』卷十四に『世說』曰、として引用されている文章だが、魯迅は『古小説鈎沈』の『幽明錄』に採録している。

吳興の徐長は鮑南海と神明の交わりをもつていた。祕術を授けようということになり、そのためにまず、徐が誓いをたてた方がよいと言ひ、徐は仕官しないと誓つた。そして、籙を授かつた。いつも八大神が自分の側にいて、過去と未來を知ることができた。才智と見識が日々高まり、縣の集落で急激に評判がよくなり、縣の主簿に任命しようということになった。徐は心からそのことを喜んだ。すると、八神はそのうちの七人がにわかになくなつた。残つた一人も尊大な様子でいつもと違つていた。徐はどうしてそつなつたのかを尋ねた。すると、「おまえが誓いを破つたから、もう助けてやらぬのだ。一人だけ残して籙を守らせているのだ。」と答えた。徐はそこで、籙を返却して、主簿の任命も辭退した。

(吳興徐長夙與鮑南海有神明之交、欲授以祕術、先謂徐宜有約誓、徐誓以不仕。於是受籙。常見八大神在側、能知來見往、才識日異、縣鄉翕然有美談、欲用爲縣主簿。徐心悅之。八神一朝不見七人、餘一人倨傲不如常。徐問其故。答云「君違誓、不復相爲、使身一人留籙耳。」徐乃還籙、遂退。『太平御覽』卷八百八十二の文による)

八神という八人の神の集團が、徐長の裏切りにより、徐長から離れるに際し、授けた籙は放つておけないため、一人の神のみが留まつたことになつてゐる。八人の神とはいつても一人一人の名はしるされず、個別に動く主體としては描かれてゐない。

また親交を結んでいたという鮑南海は、『太平廣記』では鮑靚に作る。鮑靚は、『晉書』に傳があり、南海郡太守になつてゐるため、鮑南海とも呼ばれた。そして、鮑靚は、『晉書』の傳によると、天文學や河圖洛書などに通じ、仙人陰君から、道教の祕訣を授かつたという。また、葛洪が弟子入りをした人物でもある。本文中の「籙」は、道教におけ

る祕儀をしるした文書である。さらに、「神明之交」を結んだとあるが、この「神明之交」という語は、道教の聖山茅山の楊羲が許邁、許謐らと宗教的な結びつきをもつていたというときにもちいられてゐる語でもある⁽²³⁾。このように読み解いていくと、この徐長の話の八大神も、古來から存在した八神が、道教に取り入れられる過程の存在のように思える。その時に、ここではまだ八の數を生かした設定となつてゐた。

それが、『幽明錄』八部將軍の記述では一人になつてしまつてゐた。道教經典に登場する神が志怪に登場する例もある。『女青鬼律』卷六に登場する五つの方位の神の名のうちの二人は、『搜神記』卷五において疫鬼として登場する。ここでは、すべての神ではなく、一部の神の名のみを登場させることが注目される。志怪では、多くの神をそれぞれ描くことをしていなかつた。ちなみに、『搜神記』では、この選擇した神を「將軍」と呼んでゐることも注目される。

劉敬叔『異苑』卷五にも、將軍を名乗る人物が登場する話がある。晉の義熙年間(四〇五—四一七)のこと、虞道施が車で外出してゐたところ、黒い服を着た人物が、まつすぐやつてきて車に乗りこんで言つた。「今から十里ほど乗せていつてくれ。」道施がこの人を見てみると、頭部に光があり、口や目が赤く、顔が毛で覆われていて、はじめに見た姿と違つてゐた。もう斷ることもできず、十里を進むと、言つたとおりに去つていつた。別れ際に道施に言つた。「私は驅除大將軍である。あなたが要求をのんでくれたことに感謝する。」そして、銀の鈴一組を贈つて姿を消した。

(晉義熙中、虞道施乘車出行、忽有一人著烏衣、逕來上車、云「今寄載十里耳。」道施試視此人頭有光、口目皆赤、面悉是毛、異於始時。既不敢違、行十里中、如言而去。臨別語道施曰「我是驅除大將軍、感汝相容。」

因贈銀鐸一雙而滅。)

不思議な人物が、車に乗ることを求め、そのお禮に高價なものを與えていたという内容である。この話は、『太平廣記』においては、神卷に分類されており(卷二百九十三)、やはり神の一種とみなされていたようである。移動を目的として乗車を求めたことはわかるもの、なぜそれを求めたのがわからない神として描かれていた。

八部將軍は、術數あるいは宗教文獻である可能性が高い『神譜』においては、八つの名前を與えられていたが、志怪『幽明錄』においては、『異苑』の驅除大將軍同様、一人の姿とされていた。そこにこそ志怪の特徴があるのかもしれない。四道王を紹介・分析したのち、この問題について考えたい。

三、四道王

三、一 『天地瑞祥志』の引用

『天地瑞祥志』神項では、八部將軍に引き續き、四道王の記述が載る。八部將軍と同様に、神についての説明があり、そのあとに志怪にみえる四道王の話となっている。

籍曰、「四道王者、東曰吳王、南曰越王、西曰秦王、北曰趙王也。」籍にいう。「四道王は、東を吳王といい、南を越王といい、西を秦王といい、北を趙王という。」

この「籍」が何を指すのかは、八部將軍における『神譜』以上にわからない。『本邦殘存』においてもこの「籍」は収録されていない。名前を列挙するという点が共通することから考えると、本来は八部將軍と同じく『神譜』からの引用であったのが、書名の「神」字が脱落し、「譜」字が「籍」字に誤った可能性もあるだろう。

『天地瑞祥志』第十四神項所引志怪佚文について

そして、その四道王を祀っていた廟に關する『續搜神記』の話が載る。

『續搜神記』曰、「四道王廟、與新蔡國接。國家治垣籬侵之。謝太傅忽夢見一人白說、『其是四道王。近與蔣子文兄弟率數十萬衆、助國苻堅。蔣君位隆重。已本非所希、但廟爲新蔡所侵。甚爲無理。』公覺聞左右。左右云、『如此。』公乃驚。卽教令還其所侵、更架屋宇也。」

『續搜神記』にいう。「四道王の廟は、新蔡國(河南省)と接している。新蔡國が役所を建造するときに、廟の敷地に入り込んでしまった。謝太傅は突然夢の中で一人の人物から告げられた。『私は四道王である。こんど蔣子文の兄弟達と數十萬人の兵士を率いて、國が苻堅を破るのを助けようと思っている。蔣子文神の位は非常に高い。もともとそのようにして欲しいと望んだことでもないのに、廟が新蔡によって侵害されてしまったのは、筋が通らないことだ。』公は夢からさめて左右のものに尋ねた。左右のものは『その通りになっています。』と答えた。公は驚いて、敷地内に入ってしまったところを戻し、改めて建物を建てさせた。」

この文は、現行十卷本『搜神後記』にみえず、また、同じ内容を他書に見つけることができない。四道王も八部將軍同様、「神」の語はもちいられていないが、廟にまつられているということから、四道王は、神とみなされ、『天地瑞祥志』の神項に引用されていたのだと考えられる。

本文中の謝太傅とは、東晉の重臣謝安のことである。謝安に太傅の稱號が贈られたのは、死後のことであるため、元のテキストは謝安の没後(三八五年)に書かれた可能性が高い。謝安は淝水の戦い(三八三年)で前秦の苻堅と戦い、破っている。原文の「助國苻堅」は意味が取り

にくい。史實を鑑みれば、本来は、「助（新蔡）國（破）苻堅」などとなつており、四道王は、苻堅を破るのに助力したいのだが、その前に廟の敷地を侵害しているのを何とかしてくれ、と要求した話であつたと讀みたい。

ただし、四道王の廟のある場所とされている新蔡「國」はよくわからない。まず、「新蔡國」という名稱自體、他に使われている例をみない。地名においては、○○王と王族がいたところは、「○○國」と表記される傾向がある。晋代にも新蔡王はいたために、「新蔡國」となつたのだろうか。また、謝安の事跡を調べたが、特に新蔡國との関わりは出てこなかつた。

新蔡は河南省の地名であり、戦いの前、新蔡は苻堅の支配する前秦の領土であつた。廟の敷地に入り込むというのは、自分たちの領土内でないとつじつまが合わない。あるいは、淝水の戦いのあと、苻堅を追つて北に攻めこんでいる状況の中で、新蔡の地域で、役所を建てることになり（垣は諫垣で役所の意がある）、それがたまたま四道王の廟の敷地を侵害してしまつたということなのだろうか。また、淝水の戦いであつた場合、謝安は建康に留まり、謝玄らに指示を與える立場であつた。すると、この話で夢をみた謝安も新蔡國にいたのではなく、建康にいて、訴えの夢をみて、現場に指示を出した、ということも考えられる。

謝安の夢にでてくる四道王は、先の八部將軍の『神譜』と『續搜神記』の關係に同じく、前者では複数の神であつたのが、後者では一人の神であるかのように記述されている。この四道王の正體について考へたい。

三、二 蔣子文神との關係

『續搜神記』の佚文で、蔣子文とした箇所は、本来底本では、「蔣□父」となつていた。寫本では、「文」字と「父」字がよく混同されるため、「父」を「文」にあらため、赤字部分に「子」を補い、蔣子文であると判断した。

蔣子文は、死後神となり、自分を祀るように吳の孫權に迫り、建康の鍾山に祀られた。その祀られた由來にまつわる話が『搜神記』巻五にあるのみならず、蔣子文神に關する様々な話が、六朝志怪や史書に多く残される。大きな影響力を持った神であつた。

ちょうどこの頃蔣子文は軍神として信仰を集めていた。また、淝水の戦いに際して、苻堅・苻融軍が都建康に攻め入ろうとしていたとき、司馬道子は鍾山の神に祈りを捧げている。鍾山は、蔣子文の本據地であるため、この鍾山の神は、蔣子文神である可能性が高いだろう。司馬道子は、隆安五年（四〇二）の孫恩の亂のときにも、蔣子文に戦勝を祈つている。さらには、蔣子文神は、司馬道子を害した桓玄のところにあらわれた、という話まである。

このように、四道王の事件が起きた頃は、蔣子文神の全盛期であつた。蔣子文は鍾山が本據地であつたが、『搜神記』巻五の吳望子の話では、會稽郡鄞縣に廟があるなど、他の土地にも祀られていた。また、『志怪』（『古小説鈎沈』二〇話、『法苑珠林』卷七十五、『太平廣記』卷二百九十三所引）にみられる韓伯の息子達の話では、蔣山（鍾山）廟に數體の女神像があつたという記述があり、『異苑』卷五には、青溪小姑は、蔣子文神の三番目の妹であるという記述もある。

これらからすれば、蔣子文は當時、各地に祀られ、また、その廟には他の神も祀られることもあつた。そして、他の神を身内や子分とし

て従えていた。四道王が、「蔣子文の兄弟達」と言ったのは、蔣子文の子分格として位置づけられ、共に祀られていたからではないだろうか。

ただ、この四道王も八部將軍同様、神の名前に關する直接關連した資料はない。

三、三 四にまつわる神及び五道王

「籍」による四道王の記述において、その名は東南北西に位置する國名と結びつけられていた。四方配當の神の類似例として、四海神がある。

『太公金匱』にいう。「周の武王が殷の紂王を伐ったとき、都洛邑は十日あまり冷たい雪が降り、一丈あまり積もった。甲子朔旦の日に五人の男が馬車に乗り、二人の騎馬兵を従えて、王の門の外にやってきて、武王への拜謁を求めた。武王は外に出て會おうとしたところ、太公望は駄目であるといった。雪が一丈あまりも積もっているというのに、五人の男の車と馬が跡を残していないというのは、聖人であるだろうというのである。太公望は、器に盛った粥を持って、門の外に進みでた。五人の車と二人の騎馬兵に言った。『王はまだおいでになりません。寒いので、熱いお粥をさしあげて、寒さをしのいでいただきたいと思えます。ただ、どなたからさしあげていつたらよいか順序がわかりません。』二人の騎馬兵は言った。『まず南海君、その次に東海君、その次に北海君、その次に西海君、その次に河伯、雨師、風伯に出してください。』粥を出しおわると、使者は太公望に告げた。太公望は武王に言った。『この人達は四海の神王で、會うことができます。南海神は祝融といい、東海神は勾芒といい、北海神は玄冥といい、

西海神は蓐收といい、河伯の名は憑であり、雨師の名は詠であり、風伯の名は飛廉です。名前を呼んで召し出して下さい。』五神はみな顔を見合わせて感嘆した。祝融らは皆拜謁をした。武王は聞いた。『天候の悪い中、遠くからおいでくださいました。何を指示すればよろしいのでしょうか。』四海神は言った。『天が殷の代わりに周を立てようとしているので、謹んでやってきて命令を受ける次第です。風伯らに命令して、任務を與えてやってください。』

〔『金匱』曰、「武王伐紂、都洛邑陰寒雨雪一十餘日、深丈餘。甲子朔旦有五丈夫乘馬車從兩騎至王門外、欲謁武王。武王將出見之。太公曰、不可。雪深丈餘、五丈夫車騎無跡、恐是聖人。太公乃持一器粥、出門而進。五車兩騎曰、王方未出。天寒、故進熱粥以禦寒。而不知長幼從何來。』兩騎曰『先進南海君、次進東海君、次北海君、次西海君、次河伯、雨師、風伯。』粥既畢、使者告太公。太公謂武王曰『此四海之神王、可見之。南海神曰祝融、東海神曰勾芒、北海神曰玄冥、西海神曰蓐收、河伯名爲憑、雨師名詠、風伯名飛廉、請以名前。』五神皆驚相視而歎。祝融等皆拜焉。武王曰、『天陰遠來、何以教之。』四海曰、『天代立周、謹來受命。請救風伯等、各奉其職。』〕〔『開元占經』卷一百一十三「四海神」による〕

この文は、『太公金匱』の佚文である。『太公金匱』は『隋書』經籍志子部兵書類に著録される。著者は、齊の太公となっており、あきらかな偽書である。この文は、先にあげた『天地瑞祥志』の神項二、(b)でも簡略化された文が引用されており、その他、異同を多く含みながら、類書等に引用されていることからしても、いつからかは不明だが、六朝時代には存在していたと考えられる。四海神は南、東、北、西の海にあてはめられている。祝融、勾芒、玄冥、蓐收は、他の書籍でも

それぞれの方位に配當される神である。

この四海神は、武王に力を與える存在であつた。その點は、四道王と共通する。ただ、四道王は、力を與える前に、廟の敷地の侵害を解決することを求めていた點が違ふ。また、四道王は、『續搜神記』においては、一人の姿で描かれているようである。

四道という名稱は、道教經典や佛典に少しくみえることはみえるが、『天地瑞祥志』の記述と關連するものはみつけれなかつた。ただ、一つ數の増えた五道王は、五道大王、五道將軍と呼ばれることもあり、唐代以降に廣い信仰を集めていた。その起源をたどると、吳『太子瑞應本起經』(三・四七五—c)、東晉『增壹阿含經』(二・一七〇—a)などの漢譯佛典に五道大神の語があり、一人の姿形を持った神として、輪廻とその轉生先である五道について説いている。つまり、五道王の「五道」とは、六道から修羅道を除いた地獄・餓鬼・畜生・人間・天上の各道であり、「籍」に示されたような方位の配當ではない。ただ、その五という數字は、五行などを連想させることを意圖しており、方位との關連がまったく想定されていなかったとはできないだろう。

この五道王や五道將軍は、唐代の志怪『冥報記』、『廣異記』などでも一人の姿として描かれる。數を名前に含みながらも、その數に相當する分の神格が想定されていない場合、志怪においては、その神は、より廣く活躍の場を持てたということなのかもしれない。

四、志怪における廟神の特徴

八部將軍や四道王は、神として同一名稱の記録はないものの、將軍や數と關わりのある神など關連を示す資料は色々存在し、まった

く孤立した存在というわけではなかつた。しかし、志怪における神の話としては、この『天地瑞祥志』のみに残された。志怪には多數の廟神にまつわる話があり、また北魏・酈道元の『水經注』には、廟の記録が多數残される。これらの神と八部將軍、四道王は何が同じで何が違つてゐるのだろうか。

『幽明錄』の八部將軍は、ただ夜にあらわれただけであり、目撃者に對して何も行動を起こしていない。そのために、餘計にこの話の意味がわからなくなつてゐる。また、類似した話もない。『續搜神記』の四道王のような、自分の廟の處遇を訴える話としては、晉・羅含『湘中記』(『太平廣記』卷二百九十五所引)の長沙王吳君なる人物(前漢吳芮が封じられ、代々續いた長沙王を指すか)が王僧虔の夢にあらわれて、宮室が壞されてしまつたと訴えたため、廟を立ててやつたという話や、『幽明錄』(『古小說鈎沈』第六〇話、『太平廣記』卷三百一十八所引)の三國魏の將軍鄧艾が、晉の將軍司馬恬の夢にあらわれ、自分が祀られる廟を補修してくれと頼む話があり、話の結構が類似している。王僧虔の話でも廟を建てたのちに、願つたことはすべてかなつたとあり、四道王の話と同様に報償が與えられている。

八部將軍が、物語として意味不明な斷片であり、その結果忘れ去られることはやむを得ないかもしれない。しかし、四道王については、なぜ、他の類書等には引用されなかつたのだろうか。もちろん、それは、單なる偶然であるという一言でかたづけられるべきかもしれない。

實際、他の『天地瑞祥志』のみにある志怪佚文で、類話が存在し、なぜ『天地瑞祥志』のみに残つたのかは、説明不可能な例がある。例えば第十四鬼項は、『續搜神記』から、李願と謝顯之の家で起こつた鬼の怪異を連續して引用するが、前者は現行本にもみえ、後者は、ま

つたく他にみえない佚文となっている。兩者の内容に大差はない。なぜ前者のみが他類書にも引用され、後者が『天地瑞祥志』のみに残ったのか、合理的に説明することは難しい。

しかし、四道王が、先に類似の神としてあげた四海神のような廣範な引用を引き起こさなかったのはどうしてなのであるか。

『天地瑞祥志』にも、蔣子文、丁新婦、紫姑といった神の記述が引用されていた。彼らは、全員生前のことがしるされ、神になった経緯が書かれている。姑にいびられた末に自殺したこと、命日の九月七日が女性の休養日になったという丁新婦については、歳時記などにも引用されず、後世信仰された形跡はないが、蔣子文は前述したように六朝時代に大きな勢力を持っていた。『天地瑞祥志』でも、蔣子文については、『搜神記』にみえる蔣子文が神となった由來の話の他、もう一つ『續搜神記』からとして謝玉が虎に襲われたとき蔣子文神によつて助けられた話を引用している。紫姑神も、一月十五日の行事と結びついて、後世まで生きた傳承となっていた。

志怪における神は、何かしらの人格を有し、場合によっては姿をあらわす存在として描かれているのが目立つ。

それとは別に、先に観念的に数があり、人数分だけ名前をもつ神があった。これら数を埋めるために個別の名が與えられた神は、その行動や性格が語られることは少ない。時代は後になるが、唐代に起こった十王信仰では、閻羅王や泰山府君といった既存の冥界の神のみならず、實質のない観念的な神を付け加えることで、十の數に揃えている⁽³⁸⁾。付け加えられた神は、疑經『十王經』類に名前がしるされ、十王圖に姿が描かれるが、志怪で活躍することはない。八部將軍や四道王は、先述のように、道教、あるいはそれ以前の民間信仰の中で、數が

求められて作られた神格であったのだろう。それらが具體的に廟においてどのように扱われ、祀られていたのかはわからない。ただ、そのような神に關する體驗は、他の志怪の神と同様に、人格があつたり、姿をもつたりするものとして描かれるしかなかったというのが、『天地瑞祥志』にみられる八部將軍と四道王に關する志怪の話なのではないだろうか。しかし、彼らは、名前が幾つにもわかれていたが故に、また、その中に、有力な神、あるいは人物が含まれていなかったために、自分自身の強力な物語を有することができず、根強い傳承とはならなかった。そのため、後世類書等に引用されなかった、ということが考えられる。

注

- (1) 『天地瑞祥志』の概要については、水口幹記『日本古代漢籍受容の史的研究』(汲古書院、二〇〇五年)等を参照。
- (2) 『天地瑞祥志』の現存する部分が、どのような書籍を引用しているのかについては、中村璋八『日本陰陽道書の研究』(汲古書院、一九八五年)の附録である『天地瑞祥志』引用書索引』によつて概観できる。
- (3) 本書は、現在輯佚資料集成
http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~takeda/edo_min/edo_bunka/syuiu.html (最終アクセス日二〇一八年一月十日)でテキストデータが公開されている。
- (4) 游自勇『搜神記』校補―從國圖藏BD11871號文書談起(中國人民大學國學院編著『國學的傳承與創新』上海古籍出版社、二〇一三年)が、北京國家圖書館敦煌資料BD11871號の敦煌本『搜神記』の斷片と共に、『天地瑞祥志』所引の『搜神記』及び『續搜神記(搜神後記)』の引用を

紹介している。

- (5) この詳細については、佐野誠子『天地瑞祥志』所引志怪資料について『名古屋大學中國語學文學論集』第二九輯、二〇一五年)を参照。
 『名古屋大學中國語學文學論集』第二九輯、二〇一五年)を参照。
- (6) 佐野誠子・佐々木聰『天地瑞祥志』第十四翻刻・校注(『名古屋大學中國語學文學論集』第二九輯、二〇一五年)、山崎藍・佐野誠子・佐々木聰『天地瑞祥志』第十七翻刻・校注(上)(『名古屋大學中國語學文學論集』第三二輯、二〇一八年二月)、第十七(下)の翻刻・校注は二〇一九年に刊行豫定。
- (7) 佐野誠子『含怨鬻饑——天地瑞祥志』所見的『列異傳』佚文的紹介和分析(『中國文哲研究通訊』二〇一六年第二期)。
- (8) 買地券に關する報告・論文は多數ある。本稿では、主に歴代の買地券の資料を集め考證を加えた魯西奇『六朝買地券叢考』(『文史』二〇〇六年第二期)及び同氏『隋唐五代買地券叢考』(『文史』二〇〇七年第二期)により、『○○將軍』の名を確認した。また、池田温『中國歷代墓券略考』(『東洋文化研究所紀要』八六、一九八一年)六、墓券及關聯資料錄文に存疑として收められる漢建安三年(一九八)三月窳坊買地券(二六八頁)には、『將軍亭侯』との文字列がある。また、池田氏同論文で附録として取り上げる高句麗永樂一八年(四〇八)一二月使持節幽州刺史口口鎮墳内墨書銘記及び百濟乙巳年(五二五)八月斯麻王買地券(共に二六三頁)にも、將軍の名稱がみられる。
- (9) 『道藏データベース』(凱希メディアアサービス)をもちいて檢索したところ、『道路將軍』のみ『正一醮墓儀』(南北朝時代あるいは隋唐に成書。天師道士の儀禮の書)に、名前をみつけることができた。
- (10) 『水經注』卷四河水四『五戸、灘名也。有神祠、通謂之五戸將軍、亦不知所以也』。その他、時代はあとになるが、北宋・宋敏求『長安志』卷十八蒲城縣にも馬跑將軍祠と竹谷神路將軍神祠があったとの記述がある。
- (11) 坂出祥伸『冥界の道教的神格——急急如律令』をめぐって(『東洋史研究』六二卷一號、二〇〇三年)参照。
- (12) 二階堂善弘『道教・民間信仰における元帥神の變容』(關西大學出版部、二〇〇六年)、四頁。
- (13) 梁棟『洞淵神咒經』中所見的敗軍死將信仰研究(『金田』二〇一三年第一二期)参照。
- (14) 『史記』卷二十八封禪書『始皇遂東遊海上、行禮祠名山大川及八神、求僊人羨門之屬。八神將自古而有之、或曰太公以來作之。齊所以爲齊、以天齊也。其祀絕莫知起時。八神、一曰天主、祠天齊。天齊淵水、居臨菑南郊山下者。二曰地主、祠泰山梁父。蓋天好陰、祠之必於高山之下、小山之上、命曰『時』。地貴陽、祭之必於澤中圜丘云。三曰兵主、祠蚩尤。蚩尤在東平陸監鄉、齊之西境也。四曰陰主、祠三山。五曰陽主、祠之罘。六曰月主、祠之萊山。皆在齊北、竝勃海。七曰日主、祠成山。成山斗入海、最居齊東北隅、以迎日出云。八曰四時主、祠琅邪。琅邪在齊東方、蓋歲之所始。』
- (15) 『史記』卷十二孝武本紀『上遂東巡海上、行禮祠八神。』『史記集解』『文穎曰、『武帝登泰山、祭太一、并祭名山於泰壇、西南開除八通鬼道、故言八神也。一曰八方之神。』『史記索隱』『用事八神。案、韋昭云『八神謂天、地、陰、陽、日、月、星辰主、四時主之屬。』』
- (16) 前掲注(9)『道藏データベース』をもちいて檢索したところ、著者不詳『元辰章醮立成曆』卷下において、○部(○部分には漢數字が入る)が列擧され、その中に「八部將軍將軍吏各八千人、兵士各八萬人、爲某延度厄難」との文字列を探し當てたが、この『天地瑞祥志』にある八部將軍との關連は薄いと判斷した。
- (17) 『太上說玄天大聖眞武本傳神咒妙經』(正統道藏洞神部玉訣類)正文「衛

前後則八煞將軍、隨左右則六甲神將。」注「乃玄都右勝府正衛威北八煞大將軍、八營駐劄于酆都獄、華蓋山之前也。謹顯諸煞姓名之次第。天煞將軍張子庶、地煞將軍陳子青、日煞將軍李季德、月煞將軍范子章、水煞將軍杜子貞、火煞將軍劉子大、金煞將軍王子言、石煞將軍賈子元。」

(18) 『歷世眞仙體道通鑑』(正統道藏洞眞部記傳類)「時有八部鬼帥、各領鬼兵、動億萬數、周行人間。劉元達領鬼行雜病、張元伯行瘟病、趙公明行下痢、鍾子季行癘腫、史文業行暴汗寒瘧、范巨卿行酸痛、姚公伯行五毒、李公仲行狂魅赤眼、皆五行不正、殃禍之氣。隨時更名。在東方爲魔王、在南方爲鬼帥、在西方爲外道、在北方爲鬼王、在中央爲神鬼。」

(19) 内藤湖南「近畿地方における神社」(『内藤湖南全集』第九卷、筑摩書房、一九六九年、初出『日本文化史研究』一九二四年)参照。内藤は、始皇帝の末裔を自稱する渡來人達が、兵神信仰を持ち込んだのではないかとする。

(20) 將軍神信仰については、任東權著、竹田且譯『大將軍信仰の研究』(第一書房、二〇〇一年)に詳しい。同書によつて知る限り、朝鮮半島では、八將軍はなく、日本における大將軍信仰は、西日本に偏在している。また、將軍信仰の由來については不詳としている。齋藤英喜『増補 陰陽道の神々』(思文閣出版、二〇一二年)第三章「牛頭天王、來臨すにおいて、中國由來の神が日本の陰陽道で取り込まれ變化した姿が、『靈籙内傳』に記述されることを敘述しており、牛頭天王と波梨采女とのあいだに産まれた八王子が、八行疫神、八將神と呼ばれていることを指摘する(二四―二五頁)。

(21) 『廣博物志』(江蘇廣陵古籍印刻社、一九九〇年、清刊本影印)は『世語』曰「に作る。」

(22) 王國良「幽明錄初探」(『六朝志怪小説考論』文史哲出版社、一九八八年)は、これを『幽明錄』の文でないとして退ける。張國風會校『太平廣記會校』

(北京燕山出版社、二〇一一年)の校注は、『太平廣記』の引用の前後に『幽明錄』が引用されているからではないかとの推測を載せる。

(23) 『眞誥』卷二十「楊君名義、(中略)與先生長史年竝懸殊、而早結神明之交。」吉川忠夫、麥谷邦夫『眞誥研究 譯注篇』(京都大學人文科學研究所、二〇〇〇年)は、この「神明之交」を「宗教上の交わり」と譯している。

(24) 『搜神記』卷五「初有妖書云、『上帝以三將軍趙公明、鍾士季、各督數鬼兵取人。』」『女青鬼律』では、趙公明は西方白炁鬼主、鍾士季は北方黑炁鬼主とされる。注(18)にも同じ名前がみえる。

(25) 『本邦殘存』では、この「籍曰」ではじまる四道王の記述までを、前の『幽明錄』八部將軍の俗巫のせりふとしている。中島長文・伊藤合子・平田昌司「魯迅『古小説鈎沈』校本」(京都大學文學研究科中國語學文學研究室、二〇一七年)は、魯迅が収集していない『天地瑞祥志』所引の志怪も採録する。『幽明錄』の八部將軍の條においては、『本邦殘存』にしたがつて、同様に文を取っている。しかし、四道王に關する話が『續搜神記』からとして引用されていることから、「籍曰」以下の部分が、『幽明錄』の文であったとは考えにくい。そのため、本稿では、「籍」が何を指すのかは不明なまま、獨立した佚文ととらえる。

(26) 蔣子文信仰の詳細については、林富士「中國六朝時期的蔣子文信仰」(林富士、傅飛風主編『遺跡崇拜與聖石崇拜』允晨文化公司、二〇〇〇年)が詳しく、軍神としての信仰についても指摘している。その他、蔣子文に關しては、胡阿祥「蔣山、蔣州、蔣王廟與蔣子文崇拜」(『南京師範專科學校學報』第一五卷第二期、一九九九年)、陳聖宇「六朝民間巫覡鬼神崇拜與地名——以蔣子文和蘇峻爲例」(『中國地名』二〇〇六年第一期)、二期、陳聖宇「六朝蔣子文信仰探微」(『宗教學研究』二〇〇七年第一期)、劉雅萍「中國古代民間神靈的興衰更替——以南京蔣子文祠爲例」(『世界宗

- 教研究』二〇一二年第四期)、渡邊義浩「干寶『搜神記』の孫吳觀と蔣侯神信仰」(『古典中國』における小説と儒教』汲古書院 二〇一七年、初出二〇一五年)等がある。
- (27) 『晉書』卷一百十四符堅載記下參照。
- (28) 前掲注(26) 胡阿祥論文及び陳聖宇の二篇の論文は、この「鍾山之神」を蔣子文だとする。
- (29) 『晉書』卷六十四會稽文孝王道子傳參照。
- (30) 『幽明錄』第一一八話(『太平御覽』卷三百五十九所引)。
- (31) 前掲注(26) 胡阿祥論文が、蔣子文信仰が東晉南朝の廣範圍にわたっていたことを詳述している。
- (32) 『北堂書鈔』卷一百四十四(粥篇、四海神なし)、卷一百五十二(雪篇、四海神の名はあるが具體名なし)、『藝文類聚』卷二(天部・雪、四海神なし)、神の名はあるが具體名なし、『初學記』卷二(天部・雪、四海神なし)、同項に『太公伏符陰謀』を出處とする四海神の名を含む同内容あり、『文選』卷十三謝惠連「雪賦」李善注(四海神なし)等。『天地瑞祥志』の引用文は、四海神の個別の名までしるす。
- (33) 五道大神については、小田義久「五道大神攷」(『東方宗教』第四八號、一九七六年)、荒川正晴「北朝隋唐初の在俗佛教信徒と五道大神」(加地伸行博士古稀記念論集刊行會編『中國學の十字路』研文出版、二〇〇六年)、鄭阿財「從敦煌吐魯番文書論五道將軍神考」(『敦煌佛教文獻文學研究』上海古籍出版社、二〇一一年、初出二〇〇六年)、山口建治「五道神と武塔神」(『オニ考』コトバでたどる民間信仰』邊境社、二〇一六年、初出二〇一三年)等參照。
- (34) 『冥報記』卷中「睦仁禱」や『廣異記』の「薛義」(『太平廣記』卷二百七十八)「王籍」(『太平廣記』卷三百四)など。『冥報記』の五道神は、泰山府君や閻羅王と列記され、のちの十王に入れられる五道轉輪王につ
- ながつていく存在だと考えられる。
- (35) 六朝志怪における廟に關しては、先坊幸子「六朝「廟神說話」」(『中國中世文學研究』第四〇號、二〇〇一年)等がある。また『水經注』の廟に關しては、宮川尙志「水經注に見えた祠廟」(『六朝史研究 宗教篇』平樂寺書店、一九六四年、初出一九三九年)參照。
- (36) 前掲注(35) 先坊論文によれば、廟に關する志怪でも、記録でも、廟神が祀られるに至った經緯をしるす話は、大勢を占める。
- (37) 「九月七日」は、現行二十卷本『搜神記』卷五の丁新婦は「九月九日」に作るが、従來類書などでも「九月七日」に作る例があり、本來は「九月七日」ではなかつたのかと疑念が示されてきた箇所である。『天地瑞祥志』で「九月七日」とあることは、「九月七日」説を補強してくれよう。
- (38) 小南一郎「十王經」の形成と隋唐の民衆信仰」(『東方學報』京都』第七四册、二〇〇二年)、二四二頁參照。
- 〔附記〕本稿は、日本中國學會第六十七回大會における口頭發表がもととなつている。また、公益財團法人豊秋獎學會及び科學研究費助成事業基盤研究(B)(一般)「前近代東アジアにおける術數文化の形成と傳播・展開に關する學際的研究」(課題番號 16H03496 研究代表者水口幹記)の助成を受けた研究成果の一部である。